巻末資料２　シンポジウム「季節が薫るひととき」の実況中継

暦のあれやこれやを専門の先生方と楽しく学んで「“日本版二十四節気”なるもの」を考えてみようとシンポジウム「季節が薫るひととき」が平成 23 年 2 月 10 日(金)に開催されました。

二十四節気や暦と気象に関する考察を行う内部検討委員会（平成 22 年 2 月～11 月全９回）および第１回日本版二十四節気専門委員会（平成 22 年 12 月開催）での議論をへてのメセナ開催でした。

本文では、出演者のディスカッションの雰囲気が伝わるように、話ことばを一部編集して解説資料を追加しています。

【開催内容】

シンポジウム「季節が薫るひととき」

◎主催者ごあいさつ

◎ディスカッション

出演者の紹介

二十四節気と旧暦について

新しい季節の言葉について

来場者からの質問に答えて

まだまだつづく暦の話と新しく選ぶ季節のことばに関する考察

◎参加者の声（講演終了後のアンケート回答より）

資料：案内ポスター

「季節が薫るひととき」YouTube 動画より　一般財団法人　日本気象協会　職場の様子(平成 24 年 4 月)

【主催者ごあいさつ】

一般財団法人　日本気象協会理事長　小林堅吾

日本気象協会理事長の小林ございます。主催者を代表いたしまして一言ごあいさつ申し上げます。

まず、皆様、本日はこのメセナに参加していただきまして大変ありがとうございます。

日本気象協会というと、気象庁から補助金や交付金をもらって受託事業をやっているところという誤解を受けやすいですが、気象庁からは残念ながら補助金や交付金を全くいただいておりません。実質的な意味での民間気象会社でございます。

防災・環境等に関するコンサルタント事業をやっております。同時に新聞・テレビ・インターネット等の場を通じて天気予報・気象解説などの仕事もやってきているところでございます。

気象予報をやる時に、一般的に「西高東低（の気圧配置）」「高気圧がとおる」など、気象概況も話すのですが、季節の変わり目には「どんな季節になっています」とか「どんな季節の流れのなかで今日はこういう天気になっています」、そういうお話しをすることがございます。
そういう中で非常に頼りになるのが二十四節気です。

例えば、「1月末の“大寒”は1年で一番寒い時期」だと実感できます。「“立春”が過ぎれば少しは暖かくなるのかな」とも考えられます。

そういう意味で二十四節気は日本の季節の移り変わりを反映した言葉と思う時もあります。

一方で“大雪”は12月の初旬で、スキー場の方が「今年は雪が降るのか心配だ」と思う頃で、大雪の季節といわれても何のことかという感じがします。同じように、7月下旬、これから暑くなるのに“大暑”（暑さのピークです）と言われても困る気がします。

----✳----✳----✳----✳----✳----

このあとで先生方からお話があると思いますが、「二十四節気」は、（太陰太陽暦の）旧暦の時代には月目（何月）を決める実用的な意味がありました。一年を二十四等分した季節を表す言葉としても「二十四節気」は適切でしょう。

二十四節気の中気という半分のグループを利用して、「雨水」が入る月が正月（1月）に、最後の「大寒」が入る月が12月になると決められていました。「中気が一つも入らない月は閏月」と一年のうちどの月を閏月にするかも二十四節気にしたがって決めてきました。

【参考】中気（ちゅうき）
二十四節気の偶数番目のグループ
雨水・春分・穀雨・小満
夏至・大暑・処暑・秋分
霜降・小雪・冬至・大寒

けれども、明治になって日本が新暦を採用して、月目を決める実用的な意味が全くなくなり単に季節を表す言葉になりました。そういう意味でみますと、日本人の季節感や日本の気象にあった言葉ならしっくりくるわけです。

また、二十四節気には、言葉を聞いただけでは何の意味か分からない、文字を見ても何か分からないものがいくつかあります。

そんなことで気象解説を担当している気象協会の立場から、例えば「日本版二十四節気なるもの」を考えてみてはどうかと提唱し、ここ1年ぐらい取り組んできたわけであります。

具体的には「二十四節気がどういう認知状況にあるか」というアンケートをするとかです。

----*----*----*----*----*----

今日パネリストとしてご参加いただいている先生方も含めて、暦の専門の方、天文の専門の方、気象の専門の方、それ以外に日本語の専門の方、アナウンサーの方、そして日本文学の専門の方々に専門委員として集まっていただいて、我々は「日本版二十四節気なるもの（新しい季節のことば）」をどう考えたらいいのかということを議論してございます。

今後、広く世間に公募したいと思っているのですが、色々なアンケート調査や議論からは、意外と「季節と合わないけれども二十四節気それはそれでいい」という意見もけっこうございます。逆に「この際、二十四節気を換骨（かんこつ）してもいい」との意見もございます。

これから「日本版二十四節気なるもの（新しい季節のことば）」をどういうふうに募集するのかということを今は悩んでいる最中です。

例えば、二十四節気の中で、日本人の季節感等に合わない一部の節気だけを差し替えるよう公募するかたちもございます。24 等分そのものは中国以来の二十四節気に残しておいて、我々としてふさわしい季節の言葉を考えていけばいいのではないか。それ（新しい季節の言葉）を募集してそれが 24 等分にならなくても構わないという意見もございました。

そこは議論をして、これから募集要項を決めて広く世間に募集したいと考えているところです。その募集のスタートラインが本日このセミナーの開催でございます。

スタートラインに立った上で、

・そもそも二十四節気とは何なのか
・日本の気候の特徴は何なのか
・日本人の季節感がどうなるか

とか前献立について、専門の方々のお話をお聞きして、今後募集要項を決めて公募していく作業の中で共通認識していくもの、あるいは考えておかなくてはならないもののヒントをいただきたいということでございます。

どうか皆様方も積極的に参加していただいて、パネリストの先生方と一緒に考えていただければ大変幸いだと思います。短い時間ですが、実りあるディスカッションをしてみたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

［ディスカッション］

出演

コーディネーター：梶原しげる

パネリスト：岡田芳朗　長谷川櫂　前田修平

【コーディネーターの紹介】（司会　福冨里香･気象予報士）

それでは、私のほうから梶原（かじわら）さんのプロフィールを簡単にご紹介いたします。

梶原しげるさんは文化放送アナウンサーをへて92年からフリーアナウンサーとしてテレビ･ラジオで活躍する一方、大学で心理学も学び心理学修士号を取得されています。現在は東京成徳大学応用心理学客員教授４月からは同大学の経営学部講師や日本語検定審議委員としてもご活躍中です。また、日本版二十四節気専門委員として加わっていただいております。

【出演者の紹介】

（梶原氏）ようこそ皆さま。

今日、2月10日は「布団の日」とワイドショーが言っていました。それからもう1つのワイドショーは「フット・ケア」の日だと言っていました。まぁ勝手にというか、いろいろそれぞれに、様々な思惑を持って季節の言葉や記念日をお作りになっているようです。

私はアナウンサー新人時代には特にネタがないとラジオのコマーシャルとコマーシャルの間に隙間ができると埋めなきゃいけないんですね。「埋めぐさ」として大変申し訳ないですが、気象をよく使いました。「8月8日、今日は暦の上では立秋です。」などとよく言って、熊谷方面からすごくクレームがきました。

「何が暦の上ではもう秋だよ～
オレはコンクリート上で灼熱地獄だ！」

と言われたものでございます。

そもそも「にじゅうよんせっき」と思っていたら「二十四節気（**にじゅうしせっき**）」だと、つい先だっての打合せでわかりました。そのレベルです。

実はこの専門委員会の新田委員長という気象庁の長官もお勤めになった方が、神田の本屋さんに行って「二十四節気関連の本はありますか?」と大変老舗で有名な書店で問うたところ「はぁ?にじゅうし、石器（せっき）?」と聞かれたそうです。

今日いらしている皆様方はおそらく私をはるかに上回るレベルの方々ばかりであると思います。けれども実は今これ日本もはじめ世界各国に向けてユーストリームでネット放送しております。（視聴者の）中には私レベルの方もいらっしゃるのではないかということで、「トンチンカンも中にまじった方が、見ている方にとっては都合がいい」と自らなぐさめながら進めてまいります。

（梶原氏）では、今日の出席者のみなさま方をご紹介いたします。

まず、二十四節気と深くかかわる暦のご研究ではわが国を代表する一大権威。女子美術大学の名誉教授、歴史学者で暦の会会長、岡田芳朗（おかだ よしろう）さんです。

そして、俳人としても日本を代表する方です。「季語歳（きごさい）の会」＜季語とか歳時記ですね＞の代表、東海大学文学部特任教授の長谷川櫂（はせがわ かい）さんです。

さて、前回の会合の翌日にNHKのテレビを見たら、「異常気象がどう」とマイクを向けられている方がいて、見たことがある人だと思ったらこの方でした。皆様もテレビの天気予報等々でなじみかと思います。気象のプロフェッショナル　気象庁地球環境・海洋部　気候情報課予報官、とりわけ長期予報そして異常気象の日本の最高権威でございます。前田修平（まえだ しゅうへい）さんです。

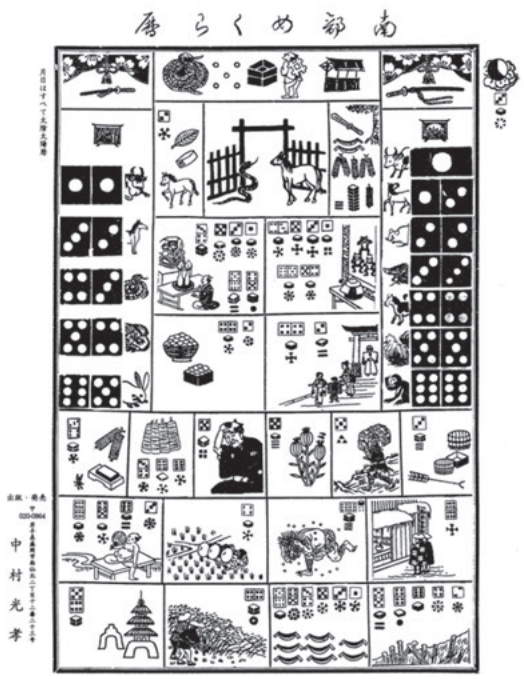
以上の皆様方とご一緒に、皆様のご意見を伺いながら進めていく、残りあと90分ほどでございますが、和やかに穏やかにやってまいりたいと思います。

（梶原氏）岡田さん、「暦の会」の会長でいらっしゃるんですけれども、これまでどんな研究をなさってきたか、簡単に自己紹介をお願いできますか。

（岡田氏）四人並んでみると、我ながら年寄だと思います。残念ながらこれだけは隠すことができない。最初はこの写真（プロフィール）が気に入らない。写真ですから本物がそのまま写っているのでしょうけどね。

わたくしは、もともとは日本の古代史が専門分野で、学生時代から日本の古代史を勉強しておりました。古代史をやりますと暦のことを知らないと具合が悪いです。歴史ですから当然です。ところが、日本の歴史学者は暦のことはあまり研究してくださらない。聞いてみると、面倒くさいしややっこしいから嫌だというのです。それで暦の本を神田に行って探すと、多少はあってもみな天文台の先生方（の執筆）ですね。それはそれなりに意味がありますが、もうちょっと「暦と社会の関わり」や「暦と文化の関わり」を調べたいと思ったのですが、そういうのはないのですね。やむを得ず自分で調べ出した。図書館で暦を見ようと思っても古い暦は持っていない、しょうがないので自分で集める。いつの間にか暦のとりこ（こよみ）になって、寝ても覚めても暦（こよみ）・暦（こよみ）と“暦（こよみ）の亡者（もうじゃ）”になったのが本当のところでしょうか。

（梶原氏）実は私も岡田さんから学んだことが多くありました。皆さまもご存じだと思いますが、三つ暦があったとか、今イスラム圏では全く別の暦で、全く別の時間軸で動いていることとか、難しい話がこれからいろいろ出てくると思います。それから南部地方では今でも使われている絵暦[注1]があります。文字を読めない人にも暦がわかるようにと工夫されたものです。後でご紹介いただけると思いますが、ぜひ楽しみにしていただきたいと思います。



（注）図：南部めくら暦

（梶原氏）さて、長谷川櫂さんです。なんと東大の法学部をでて読売新聞へいって俳人になったというちょっと変わった経歴です。

俳句といえば季語、季節歳時記などから、移り変わる季節に最もふさわしい言葉を句に織り込んで（つくります）。最近ではあの大震災の句をお読みにもなって多くの人々の共感を集めています。

（長谷川氏）僕は中学校の時にとてもいい国語の先生と出会って、言葉というものは実に面白いと思ったんです。その時の気持ちがまっすぐ今まで続いて途中紆余曲折しましたが、結局また言葉を仕事にする俳句という仕事をやっているということです。途中の紆余曲折とは、ひとつは大学の選択を間違い、法学部に行ってしまったことです。新聞社を「言葉を使うから言葉の専門的なことをやっている」と思ったらこれもまたやや誤解があり、46 歳の時に新聞社をやめて俳句だけでやっていこうと思いそれからずっとやっています。46 歳になってやっと今の俳句の道に入れたということだと思います。暦との関係を申し上げると、俳句とはご存じのとおり季語を入れるという約束があり、これを1つ入れなくちゃいけない。俳句を詠んでいくと、どうしても暦と関わらざるをえないですね。今日、俳句を詠まれる方がみえていると思いますが、俳句をやっていると二十四節気や旧暦に関心を持たざるをえない。それを知っていないと俳句が詠めないということがありまして、自然と暦について関心を持つようになりました。ひとつ申し上げると、日本は明治のはじめに、西洋にならって旧暦から太陽暦に切り替えたわけです。普通の人は「日本の暦は太陽暦」と思っていますが、実際に細かくみると、色々な暦が複雑に入り組んで動いている。暦とは単に時間の流れのメルクマールだけでなくて、もとが太陽とか月の動きを基本にしていますから、「人間と宇宙の関係」を、生きている人たちがどういうふうに考えてきたかの集大成です。そういう意味でとても面白いと、いよいよ興味を深くもっています。

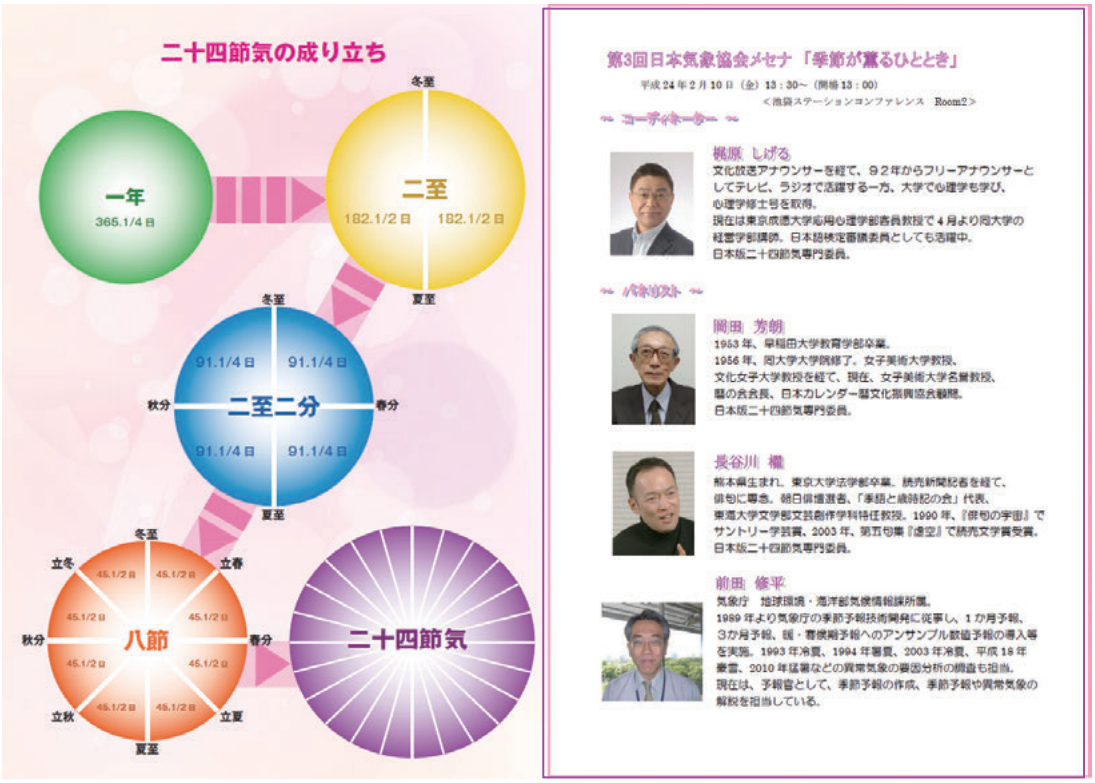
（梶原氏）今日も東北や北陸では大変な雪が降っていますね。先週、私、山形に行き、結局2日ほど帰れなくなりました。平成 18 年以来の大雪をしのぐかと取材が殺到している気象庁の前田修平さんにご紹介お願いします。

（前田氏）目先の予報です。いったん強い冬型が緩みましたが、週間予報の終わりぐらいからまた冬型になってきます。北日本や東日本はまた雪に警戒が必要です。

私ですが、暦とは全く縁がないかと思っていました。私はもともと地震とか大気の流れや海洋の流れが好きで、高校では地学を勉強して面白いと思いました。大学を選ぶ時に地球物理系の大学に行きたいと探したら、「気象大学校がただで行けます。防衛大学と同じように入れば給料もらえる。気象大学校とは気象庁の技術者養成の学校で出ればずっと気象庁に

勤められる。」ということで気象大学校を選んで、以来 30 数年気象をやっております。特に気象の中で、長期予報とか異常気象とかちょっと長い時間スケール、季節に関わる現象を担当しております。

今回対談に参加してくれと依頼されて、言葉について鈍感だったので非常に心配しました。けれども、打合せで岡田さんや長谷川さんの話を聞くとものすごく暦って面白いですね。旧暦や二十四節気が発生した中国と日本との季節変化の違いがすごく明瞭に現れたりしているということです。今日は対談ですけれども暦に全く素人のものがある程度推察つくという立場で加わっていきたいと思います。



（来場者への配布資料）表：二十四節気の成り立ち　裏：出演者の紹介

【二十四節気と旧暦について】

（梶原氏）皆さま方のお手元にある資料をご覧いただきながら、二十四節気がどういうことで、大陸のどのあたりでいつごろ生まれて、日本にどういう形で伝来し、それをどういうふうに我々は活用し今日に至っているのかという大ざっぱなところを岡田さんからご説明いただきます。

（岡田氏　起立して）学校の教員はこういう番になりますと、がぜん元気が出て、立って1時間でも2時間でもしゃべりだすときりがございません。

二十四節気はいわゆる旧暦の一部で旧暦にはなくてはならないものです。旧暦は月の満ち欠けをもとにしますので、1年が354日、3年にいっぺんぐらい閏月が入りますと384日ぐらいになります。

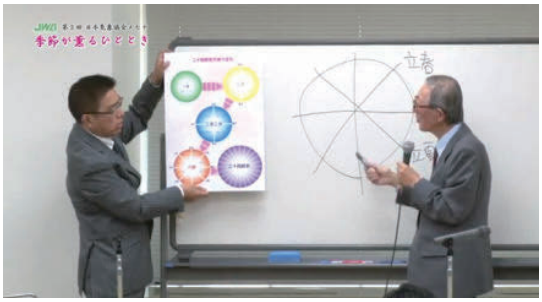
今日は旧暦ですと1月19日です。来年の今日は1月1日（旧暦の元日）、再来年は1月11日、もう1年先は12月19日です。つまり、旧暦では月の満ち欠けはよくわかるけども季節が暦と一致しません。

毎年、毎年、季節が変わります。これでは種まきも田植えも稲刈りも旧暦だけではとてもダメです。そこで本当の季節を知らせるのが二十四節気です。お手元のきれいな絵をみていただけるといいですけど、それだけでは迫力がありませんので、ちょっと板書させていただきたい。何しろ教員は、何か書かないとすまないですねぇ。

お手元の絵（配布資料）、これは太陽暦の方がもとになっております。1年365日が丸です。（丸を板書して）、それを冬至と夏至に半分に分けます（縦の線）。半分は182.5日ぐらいになりますかね。さらに春分と秋分で半分（横の線）に分けます。そうしますと、91日ぐらいずつになりますね。

（「Q春分とは冬か？」に答えて）春ですね。

3月21日の春分と、9月の秋分、一年を四つに分けて、そのまた真ん中45日ちょっとのところを分けて、冬至と春分の真ん中を立春とし、さらに春分と夏至の真ん中を立夏･･･と各季節のはじめを決めるわけです。二至二分（にしにぶ）とか「しりゅう」・「しりつ」と言います。合計しますと八節（はっせつ）になります。これが二十四節気の一番もとになる考え方で、天文学的に割り出されるこの二至二分は問題ないですし、西洋にもあります。ところが、ちょうど真ん中を春のはじめ、また真ん中を夏のはじめと機械的に分けたのです。スイカを半分に、四つに、八つに切って一切れいくら。（梶原氏）子供たちが喧嘩しないようにですね。



（岡田氏）同じ長さ、同じ重さにしないと不公平ですから、全部きちんと四つに八つに同じ日数に分けちゃった。それで、季節と合わないというイメージを持ちます。ひとつにはこういうふうに機械的に分けているということがあります。

もともと二十四節気という発想は中国で起きたもので中国の北の方の気候にはかなり合っていても、それより暖かい日本では少し合わない

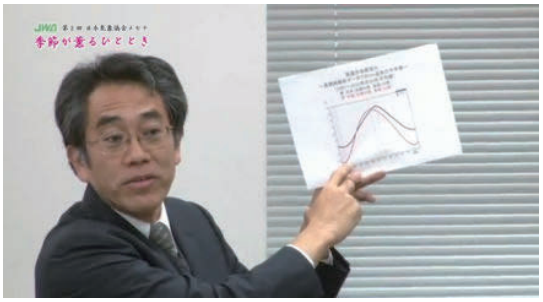
のは当たり前。これがぴったり合うと思う方は、どうしても合わせたいという方かも知れません。これ以上やりますと切りがないですからね。

（梶原氏）大筋ですが、今知ったキーワードで「2500年前の中国」～
（岡田氏）二十四節気が完全にできあがったのは2200年前から2300年前で、二至二分の考え方は2500年前かな～。だんだん整備されて最終的には2000年以上前に今の二十四節気ができあがった。
（梶原氏）それができた中国の地域は大陸性気候ですよね？今でいうとどのあたりですか？
（岡田氏）華北（かほく）です。大体黄河の中流域がおそらく基本になっている。
（梶原氏）そのあたりの季節感を二十四節気でえがいているのを日本（にっぽん）にもってきた。日本にそのまま緯度をずらすとどのへんになりますか？
（前田氏）仙台から秋田です。

ズレのポイントは、大陸の中にあるのか、海洋の気候なのかということです。大陸は太陽が上がってくるとすぐあったまるし、冬だとすぐに冷えるということですね。一方、海洋はあったまりとか冷えが遅いです。一年でこう周期的にきれいに変化するのですが、その位相のズレが当然おきます。

私、気象庁なもので、過去30年分のデータを調べてきました〈気温の変化図を提示〉。黒線が1月から12月までの日本付近の気温の変化です。8月頃が一番高く1月か2月が一番低い。

一方、赤い線が黄河中流域です。年変化しますが、少しズレていることがわかります。二十四節気でいえば、一節気か二節気分です。半月からひと月分ぐらい季節がはやくなっているということです。



これ（赤い線の2月頃）は、二十四節気ができた黄河中流域です。2月の3日、4日あたり、そろそろ寒さから脱出できる、だんだん暖かくなるのが実感できる時期です。一方、日本ではまだ1月下旬から2月上旬の一番寒い時期です。立秋、8月8日も同じで、黄河中流域はもう気温がだんだん下がってきている、秋が始まってきていると感じる時期ですが、日本はこれからまだ暑いかもしれない。これは、温まりやすく冷えやすい大陸上と、熱容量が大きくて温まりにくい冷えにくい海洋性気候の日本との違いでもあります。

（梶原氏）大陸性気候と海洋性気候とでズレが出てくるということです。けれども、実は長谷川櫂さんの「決定版一億人の俳句入門」という本には、あまりそういう実態と句に詠みこむ季語と合わせる必要がないと書いてあるように私は受け止めたのですが、長谷川さんの考え方はどうですか？

（長谷川氏）前田さんのおっしゃった「二十四節気というのは中国の華北の気候に合っている。日本は海洋性、つまり水に囲まれているからそれがちょっと遅れる。」という話ですが、暦に限らず、日本は古代から中国からの文化文明を、全面的に継受しながら日本の独自の文化を

作ってきたんですけれども、ことごとくズレていますね。暦だけじゃありません。例えば、文字はもともと日本にはなかったわけでが、漢字で大和言葉を表そうとすると、どうしても自分たちの気持ちがあらわらせない、それでひらがなをつくるわけです。「ちょっとズレているところで独自の文化を作っていく。」
ひらがなで源氏物語や伊勢物語を書いて、その後の日本の文学が生まれてくるわけです。

同じようなことが暦についても言えます。ズレていたから日本人は季節に対して非常に敏感になったと僕思うんです。中国では立秋といわれればちょっと涼しくなりそうだなって気配がある、だけど日本ではこれから暑くなりそうだなという時期（8月8日頃）に立秋があるわけです。そうなると「なぜこれが秋？」と当時の人もみんな思って秋らしい気配を探ろうとする。「暑い最中に秋の気配をさぐる」これが繊細な日本人の季節感の基本です。この季節感をもとにあらゆる日本の文化が成り立っているので、このズレこそが良かったのではないかと思います。

（梶原氏）「朝顔」の季語が夏だと思っていたのですが、夏じゃないですね？
（長谷川氏）朝顔は、実際7月あるいは早ければ6月の梅雨時から咲き始めますが、「歳時記」を開いてみると秋のはじめ、つまり初秋の季語になっています。これはなぜかというと、朝顔は暑さの盛りの中で見るものじゃなくて、朝涼しくなった頃に、露がおく頃に、花の上に露がのって秋の気配を感じさせる花として初秋の季語です。一種もうフィクションとして割り切ったほうが季語は早いですね。

季語というのはフィクションでできている。そういう約束事の上に成り立って俳句は詠まれ、日本の文学は進んできていると思った方がいいです。

【会場からの質問にお答えして】

質問は来場者が事前に記載した中から選定されています。

（梶原氏）さて、会場の皆さまから二十四節気や暦についてご質問をいただいておりますのでお答えいただきたいですが。

（岡田氏）いろいろな暦にいい悪いと評価がでると思いますけど、旧暦は月の満ち欠けをもとにしますから何月何日といっても正しい季節がわからない。旧暦は二十四節気といつもセットになっていて、正しい季節は二十四節気をみるから暦を二通り見てなきゃいけない。太陽暦ですと、2月10日、来年2月10日、再来年2月10日と何年かの平均の気温、平均の湿度とか気象状態がわかります。けれども、旧暦の場合は何月何日では季節がまちまちですから平均気温や平均の日照時間はまず出せない。

それは二十四節気を横目でながめて、立春から何日目とか夏至から何日目で大体の気象状態がわかる。「何月何日ではどうにもならない」ある意味では不便です。江戸時代の農業の指導書「農書」を見ても、何月何日に種まけとは書いていない。「立夏の頃に種をまけ」と（書いてあります）。

二十四節気の応用編として、「八十八夜」や「二百十日」、春夏秋冬の「土用」などの雑節（ざっせつ）があります。例えば、冬の土用の最後の日が節分で豆をまく。雑節は二十四節気をもとにしていて、八十八夜や二百十日は立春から数えます。両方ないとダメですね。

太陽暦なら2月4日といえば、大体これぐらいの温度でこれぐらいの雪が降ってと分かります。月日だけで気温も分かる、そういう特色があります。

「旧暦が便利」という方に私が不思議に思うのは、旧暦ですと33ヶ月にいっぺんの割合で1ヶ月の閏月（うるうづき）を入れる。今年は閏3月があり3月が2回ある、今年は384日、13ヶ月ありますから、会社の経営者は13回月給を払うことになる。

（梶原氏）こりゃ大変だ！

（岡田氏）お役所も月給を13回払う。

（梶原氏）税金の面でも大変ですね。

（岡田氏）当然、消費税は値上げしなければならん。（総理大臣の）野田さんは喜ぶかもしれないですけれど、近代的な社会では旧暦は難しい。農業をやる上で色々社会生活をする上でも。

ただ、旧暦は「情緒」を表す。日本に旧暦と二十四節気が入ってきてかれこれ1500、1600年。大体6世紀中ごろに入っていますから1500年だ。それから万葉集の時代になると知識階級の間にはかなり二十四節気も普及しておりました。例えば、「年内立春」を大伴家持が万葉集に収めた歌でさかんに詠んでいます。長い間伝統があって、日本の文化が確かに旧暦をもとにして育ってきた。日本の古いものを理解する、現代生活の中で情緒を味わおうという場合には旧暦はいいけれども実用面では無理ではないか。私はいつも言う。「旧暦では新幹線が走らないじゃないか」

（梶原氏）予約が難しくなるわけです。

（岡田氏）そうですね。13ヶ月だと難しいですね。しかも旧暦だと毎年月の大小の配置がかわります。正月がかならずしも30日の大の月とは限らない。2月が29日の小の月とも限らない。毎年組み合わせがかわります。ですからもう来年のことを考えるのはなかなか難しい。

（梶原氏）ということで、（会場の）福岡さんへのお答え。「旧暦の方がいちがいにいいとも言えない。旧暦も役立つということです。」

（梶原氏）今、情緒の面で季節を感じる上で、例えば、「七夕はよく織姫と牽牛が会えない、今年も梅雨で星が見えなかった、会えなかった」などの話もあります。これを長谷川さんの立場からすると旧暦だったら月が半月ぐらいでちょうどいい感じでみえるんですかね。

（長谷川氏）七夕は･･･大変な問題です！　今、実際、銀座で七夕の飾りをたてるのは太陽暦の7月7日前です。東北の方へ行くと今度は8月はじめ、つまり旧暦の七夕の7月7日ごろに色んなお祭りがある。つまり、日本では二つ（七夕が）行われているわけです。それは旧暦と新暦がまだ両方とも生きているからです。どっちがいいではなく、我々日本人が現実の問題として両方を生かして暮らしているということです。どっちかに決める必要はなくて、我々のやりやすいようにやればよい。

七夕はいつかと言われますと、「旧暦七月七日では秋で空がすみはじめて天の川もよく見えてぴったり、太陽暦のしちしち（七七）は梅雨の最中ですけれどもこれも七夕」と日本人が認めているから、二つとも認めざるを得ないと僕は思うのです。

もともとこの問題が起こるのは、空に月と太陽があり、お互いに関連しながら動いているのではなくて好き勝手に動いているのでずれてくるわけです。太陽の暦をとるか、月の暦をとるかで世界が二分されてきたことで問題があるわけです。どっちも間違いではなく両方とればいいではないか。

さらにいうと、日本に旧暦が伝わった6世紀以前も日本人はいたわけで、その時は旧暦以前の自分たちで考えた原始的な暦があって、それは満月を中心とした暦です。旧暦はご存じのとおり、新月から、月がない時から1,2,3,4と数えていく、これはかなり高度な暦ですけども見ればすぐわかる。

満月が月のはじめという考え方が旧暦以前日本にあって、これを「太古の暦」とします。これ

が一千年、何百年もたっていますが、なくなったかというとなくなっていないです。一つは中秋の名月です。中秋の名月になると必ず新聞にも写真が載るし、NHKでも(放送)なさる、日本人にとってもなじみの深い行事です。これは旧暦の中では15日としているけれども、旧暦が伝わる以前はおそらく月のはじめの満月の行事だったのではないか。

正月(一月)にはいわゆる小正月がありこれが満月です。だから「太古の日本人の正月」や「中秋の名月」が今もなお生き続けているわけです。「太古の暦」と「旧暦」と「太陽暦」、3つを我々は、ひらがなと漢字を使い分けるように、使い分けて何の不都合もない。これはもう認めてしまっている。(旧暦と太陽暦の)どっちかが役立つとか考えないでいいところをとっていけばいいと僕は思う。

(梶原氏)長谷川さんの話だと、正月は、3回やるということですね。

(長谷川氏)今の太陽暦の1月1日と旧暦の1月1日(今年は1月23日ぐらい)、それと「太古の正月」。これが15日後ですから・・・いつごろになりますか。お正月が〜。

(梶原氏)春節になりますかね?

(長谷川氏)いえ、違います。春節は旧正月のことで今年は1月23日です。

(梶原氏)長崎のランタン祭りも正月ですか?

(長谷川氏)正月ではないですが、華僑の人たちが多いので、(長崎は)昔から国際的な街ですけれども、大陸の中国も韓国も東アジアの国は新暦よりは旧暦の正月を盛大に祝いますからこうしてやっている。

(梶原氏)二十四節気は季節に関わるから「節季」の方じゃないかという気がするのですが?

(岡田氏)「季」は春・夏・秋・冬というちょっと長い周期ですから、一つは長さの問題もあると思います。

もともと「二十四節気」は新しい言い方です。古い言い方だと「せっき」と言わずにただ「き」、江戸時代ぐらいまでは「にじゅうしき」です。

二十四節気は、立春から数えて奇数番のものを「節季(せっき)」あるいは「節」、偶数番は(例えば立春の次の雨水)雨水から数えて一つおきに「中気」もしくは「中」。「これは二十四節気の中ですよ」という意味で「節気」「中気」という言い方をするようになってきています。古いものではただ「節」とか「中」とよび、例えば「正月節」、「正月中」という言い方があるんです。この場合「二十四節気」の「気」であって、期間

的には「季」よりは短い。一年を24に分けるので(「気」は「季」より)もっと短い期間のことをいう。

それからもう一つ、「気」という言葉の中にはちょっと精神的な要素があり「気持ち」もあります。「気学」という一種の精神的な発展、研究もあり、二十四節気にそういう面は含まれている。季節の方の「季」には純粋に1年の4つの季節、あるいは他の言い方にも使うかもしれません。何となく「怠け者の節季働き」なんて言葉も連想して、こちらの季を使いたくないですね。冗談ですが。

(前田氏)気象庁が観測している過去100年ぐらいで、都市化の影響を受けないような地点では100年でだいたい1℃上がってきてます。

実は気象観測は百数十年しかないです。過去の気候は、例えばサンゴ礁の記録や南極の氷の記録から測っています。日本では屋久杉の年輪で過去2000年ぐらいの屋久地方、屋久島地方の気温がわかるのです。年輪でその年を同定して、年輪の中で構成されます炭素の同位体、炭素の中性子が多かった〜でだいたい気温がわかる研究があり、2500年ぐらい(気温が)どう変化してきたかがわかります。それを見ますと、ちょうど二十四節気がわたってきた600年頃の後、奈良時代の後半から平安時代の前期はけっこう気温が高かったです。ちょうと今ぐらい。戦国時代とか江戸時代、明治後半はかなり低い。

実は、二十四節気は2000年の長い気候変動を経験して、それを耐えてきているものという感じがします。そういう意味で今の100年ぐらいの温度でずれてきたということはあまり考えなくていいとは思います。

(梶原氏)異常気象によってすでに二十四節気が陳腐化したとは言えないということですね?

(前田氏)そうです。もう1個、(二十四節気は)かなり幅広い領域で使われています。聞いたところ、中国・韓国・日本のみならずベトナムでもです。広い気候帯で使われている言葉なので、その中で少し変動しても、それほどズレを新たに生じてきているという感じはないと思います。先ほど言いましたように大陸と海洋、できたところとの場所の違いで季節の位相のズレの方が大きいかなと思います。

【まだまだ続く暦の話と新しく選ぶ季節のことばへの考察】

（梶原氏）二十四節気は、日本だけで純粋に残っていますか？それとも、中国でも二十四節気は折々ニュースや何かで「今日は立春ですよ」と使っているのですか？

（岡田氏）もともとは中国です。中国では二十四節気まで守られています。それに基づいたいくつかの行事も行われております。かれこれ2000年以上の歴史がありながら二十四節気の中の名称はほとんど変わっていない。

一つだけ、「啓蟄」があります。日本では「拝啓」の「啓」を使いますけども、中国や韓国では「おどろく（驚）」方を使っています。

（梶原氏）びっくりする「驚嘆」の「驚」

（岡田氏）冬眠していた虫がびっくりして出てくるという話になっていますけども、もともとは「拝啓」です。暖かくなって地面の中から顔を出すから「拝啓」という字を書いて「啓蟄」と。

それが漢の時代の皇帝にお名前が「景色」の景、「景帝（こうてい）」という方がいらして、その方のいみ名が「拝啓」の「啓」でした。「啓さん」です。中国では皇帝のお名前をいろんなものに使ってはいけないという、非常に厳しい取り決めがあり、二十四節気の「啓蟄」は「驚く」に変えたのです。漢の皇帝ですから後の時代に王朝が変われば、そういうタブーなないはずですが、長年の伝統で中国ではずっと「驚く」を使っていた。だた、（日本の）奈良時代の暦では、中国でも「拝啓」でいいと元へもどったのです、何百年ぶりに。ちょうどその頃日本でも中国の暦を取り入れたので「拝啓」の「啓」になった。ところがその後、中国はまた「驚く」に戻って今日に至っている。そこだけが、日本と中国韓国で違います。中国と韓国は同じです。

それと、使っているのはいわゆる漢字文化圏、中国の文化の影響を受けた周辺の国はみんな二十四節気を使った。かつてはタイ、ラウス、カンボジア周辺でもあったと思いますけども、今でもはっきり残っているのはベトナムです。ベトナムは、北の方でも亜熱帯で南の方は熱帯ですが、「小雪」、「大雪」、「小寒」、「大寒」があるんですよ。

（梶原氏）雪みたことがない人が「大雪」を。

（岡田氏）そうです。「暑い、暑い」と言いながら「大寒」だった。ちょっとユニークだと思います。東アジアでは二十四節気は非常に広い範囲で他に色々な民族でも使っていたと思います。それぞれの地域でそれぞれの人たちが二十四節気に対する情感をもって使ってきたという感じです。

----✳----✳----✳----✳----✳----

（梶原氏）イスラム圏、アラビア半島、あたりですと農耕にあまり関係ない人々にとって、二十四節気のようなものはありますか？

（岡田氏）東南アジアからずっと西、インドも含めての中近東は暦でいうとイスラム暦（を使っています）。

特にイスラム暦は純粋に太陰暦で、1年が354日ないしは355日ですから毎年11日づつ暦の方が先へ行くのですね。お正月が毎年11日づつどんどん、どんどん早くなって15-16年たつと、お正月が真夏になるのです。33年たつと、丸一年早くきてしまう。

梶原さんぐらいのお年の方ですと、2年ぐらいは早く年をとってしまう。年金は早くいただけてしまう。ひょっとするとあちら（お迎え）の方も2年ぐらい早く来るかも知れない（冗談）。

それですと暦の日付では季節はわかりません。あまり農業がないと言っても多少農業の家あり

ますし、季節に関係して人間は生きています。そこで西の方では、ギリシャあたりからはじまっている「黄道十二宮」があります。星座、星座占い、十二宮、十二星座、今太陽はどこの星座にあるか、星座などを暦に書いてありまして、今日は暦の上では例えば1月だけれども天の星座の方は8月だと。だから、天の星座の方で、十二宮の方で季節を知る。二十四節気の区分よりあらっぽい12区分しかないですが、太陽は何座にあり、そうすると今は夏だなぁ、暦は冬になっているけれども季節は夏だとか秋だとかそれで知るのです。

（梶原氏）今のイスラムで、例えばサウジアラビアでは、今も実際に（イスラム暦を）使っている？

（岡田氏）建前はイスラム教の国々では今もイスラム暦を使っている。ただ、大部分の国では、経済にしても文化にしても世界的な交流がありますから、多くの国のカレンダーには我々と同じグレゴリオ暦の日付とイスラム暦の日付が両方書いています。宗教的な行事は純粋にイスラム暦でやります。

（梶原氏）ラマダンはよくニュースでやりますよね。断食月は何となく夏のイメージがありますが？

（岡田氏）いいえ、それがいつでもあるわけです。いまは大体冬やっています。ラマダンは日の出から日の入りまで飲み食いしてはいけないです。冬だと日も短いし喉もあまり乾かないから我慢しやすいです。ところが夏場のラマダンだと、いつまでたってもお日様沈んでくれません。カンカン照ってきて、それはもう死にそうです。だから同じラマダンでも巡礼月も季節のいい時にあてはまればいいですけども、そうでないときに当てはまったら大変苦しいですね。それはもうその人の運の問題。

（長谷川氏）それはちょっと大変ですね。多分、星座が、日本の二十四節気と同じ役割をしているという話ですね。考えてみると、二十四節気とぴったり当てはまって、今2月で（季節の）暦がみずがめ座ですか、それがちょうど立春の前後でぴったりあっている。

----*----*----*----*----*----

（梶原氏）「気象ハンドブック」（NHK出版）を見ますと「二十四節気」と「雑節」という言葉が書いてあります。「雑節」とは、「八十八夜」、「入梅」、「半夏生」と二十四節気に書いていない言葉をいうのですか？

（岡田氏）（雑節は）二十四節気の応用編、あるいは補足編といいましょうかね。今でも二十四節気の名前を全部覚えている方はそうたくさんはいらっしゃいませんよね。江戸時代でも、よほどの学のある人でないときちんと読めないかも知れませんし意味も十分理解できない。ところが人々は旧暦だけでは正しい季節が分かりません。二十四節気を読めばいいですけれど、分かりやすい表現が必要でした。例えば、「八十八夜」、「二百十日」、これは立春から数えるので二十四節気の応用編です。「八十八夜」と言いますと、茶摘みの歌があります。茶摘みの頃、種まきの頃です。「二百十日」といえば台風がそろそろくる。「七十五日」は農業の目安になり、東北地方では「花盛り」という表現で4月下旬の弘前あたりの桜が咲くころ。

いろいろな応用編として、例えば一年に四回の土用があります。

（梶原氏）土用の丑の日の「土用」

（岡田氏）冬の土用の最終日が節分。翌日は立春。春の土用の翌日が「立夏」というように、各季節の終わりに十七日もしくは十八日に「土用」があります。「土用」が終われば、立春だな

ぁ、立夏だなぁ、と大体の季節はわかります。同じように「入梅」。「入梅」といいますのも昔は気象用語ではなくて、暦の用語です。

（前田氏）（気象用語では）「梅雨（つゆ）の入り」です。

（岡田氏）「入梅」は暦で二十四節気をもとにして何日目と決めている。同じように「半夏生」は、だいたい7月1日ぐらいですけども、これは梅雨の初め、真ん中頃ですかね、一番高温多湿で健康に良くない頃だとか、天から毒の雨が降ってくるとも（言われます）。本当に降ったら大変です。それぐらい気候が悪いから食べ物に注意しろと、いう応用編がいくつかある。二十四節気そのままでは覚えにくいところは応用編の雑節を利用して本当の季節をみなが知ったわけです。

（梶原氏）雑節は「雑」という字がありますが、雑ではないですね。

（岡田氏）「雑」な感じが〜、明治の初めに暦を編纂した方の名前の付け方がちょっとまずいのでしょう。

（梶原氏）まずいですねぇ。とても分かりやすくて身近な言葉がいっぱいあるんですねぇ。「雑節」。それこそ前田さん、予報を伝える時に「木枯らし1号」とか「春一番」のようにけっこう「雑節」は使っていらっしゃるでしょうね。予報官も。

（前田氏）気象庁の予報官はあまり使いません。「1月上旬とか」

（梶原氏）「上旬」、「中旬」、「下旬」という言葉を使いますよね。

（前田氏）一年を36区分に分けてモニターしたりしています。

（梶原氏）24でなく36ですか。

（前田氏）月のまとめは旬ごとで、上旬はこうだった、中旬はこうだった、下旬はこうだったと。季節のまとめも二十四節気ではしませんねぇ。

旬という単位は、農業気象関係でよく使われています。72（区分）とは半旬といって5日ごとで出している。完全にカレンダーどおり、1日から5日とか、ときどき6日間があるんですけれども、そんなふうに使って。

【参考】雑節（せつぶん）
節分（2月3日）
八十八夜（はちじゅうはちや）（5月1日頃）

立春から数えて88日目

入梅（にゅうばい）（6月11日頃）
半夏生（はんげしょう）（7月2日頃）
二百十日（にひゃくとおか）（9月1日頃）

立春から数えて210日目

土用（どよう）（1月17日・4月17日・7月20日・10月20日頃）
彼岸（ひがん）（3月20日・9月23日頃）

----✳----✳----✳----✳----✳----

みなさんにお伝えする気象キャスターさんはよく使われると思います。記者の方に、「大寒」だけどもなんか記事にいいネタはないかとよく聞かれます。そういう意味では一般の方に伝えるところでは使われると思いますけども、気象庁としてはそれほど気にしていません。

（梶原氏）キャスターの方が、メディアに伝える時も「素敵な言葉」が流行っています。俳句や短歌の世界や、街でも見逃しているものがあればそれを織り込んで、「今だなあという言葉」ほしいですよね。というのを実はみなさんに考えていただきたいなというのが今回の趣旨でございます。

日本には伝統的に二十四節気というものがあります。「日本には」と偉そうにいうと中国にしかられますが。

二十四節気をもちろん今後も活用していこうというのですが、それに合わせてさらにもっと今、「雑節のようなもっと馴染みのある言葉」も季節の言葉としてないだろうか？それを全国のみなさまに、全世界のみなさまに頂戴しようじゃないか、お知恵を絞っていただきたいというのが今回の趣旨でございます。

（岡田氏）多少関連のあるもので、月の異名、「和風月名」があるんです。旧暦の一月、二月、三月、四月･･･という中国からやってきた月の名前に、日本人が如月（きさらぎ）、弥生（やよい）･･･と日本語で月の名前を考えたのです。今でもよく使われています。本来、旧暦の月に対する言い方です。今二月ですがカレンダーをみると如月（きさらぎ）と書いてある。本当は旧暦の一月で睦月（むつき）のはずです。これが1つの発想です。

「二十四節気」は伝統的なものです。妙にいじらない方がいい、それなりに価値がありますから。

これとは別に、我々が親しみやすい言葉を。俳句の季語の中にもたくさんあるし季語以外にもある。季語の中でも、「和風月名」のような発想で一番親しみやすい言葉、一番その季節にふさわしいネーミングがある。すでに気象用語では断片的にはあると思う。例えば、「菜種梅雨」、「卯の花くたし」といくつかございますよね。俳句の季語ではなくても、天気予報で耳に入って何となく皆さんが使うようになった言葉も断片的にある。そういうものも含めて一年通しでそれが24であろうと35がいいか、12がいいかそれはまた別として、つなげて一年のぞれぞれの季節にふさわしい言葉でまとめられるといいなぁとは思う。

（梶原氏）そういう素敵な言葉があったのですね。長谷川さん、例えば季語の中からぜひこれはこの季節を感じる、例えば今、まもなく春に近づくときにふさわしい言葉としてご推奨のものがあったら教えていただきたい。

「卯の花」皇居東御苑　都市開発で失われた武蔵野の植生が残っています。

（長谷川氏）その前に「卯の花くたし」の説明を。卯の花は5月の頃の白い花で夏の花です。卯の花のにおいがする頃に雨が降って卯の花を「くたす」。「くたす」とは「腐らす」という字を書きますが、それで卯の花の頃の雨を「うのはなくたし」というのです。とても豊かなイメージのある言葉です。

それで、今岡田さんがおっしゃったとおりに、二十四節気、従来のものはそのままにしておいて、今の新しい日本人の年中行事でもいいものを選べば、僕は非常にいいじゃないかと思う。

明治の初めに旧暦から新暦に変わったのですね。先ほど七夕の話で、7月か8月かと日本中でウロウロしている、ようするに旧暦時代の年中行事がズタズタに壊れちゃったんですね。100年たってもできていないので、こういう機会に季節にふさわしい言葉ができればいい。

例えば、大胆に考えればよくて、「クリスマス」は西洋からきているじゃないかと思われるかも知れないですがあってもいいですよ。もともといろんな行事は中国からきていることを考えると「クリスマス」もあってもいいし、「バレンタインデー」を入れたらデパートが大喜びするでしょう。

今の季節では節分も入りますよね。節分は立春の前だから入るだろう。春節は旧正月ですけどもこれは二十四節気とは別の旧暦の1月1日です。

春節も中国や韓国では新暦の正月より旧暦の正月を盛大に祝って日本にたくさん買い物にみえる、そういう意味で、東アジアの1つの象徴として旧正月や春節を入れてもいいかも知れないです。そういう言葉がたくさん寄せられるといいと思っております。

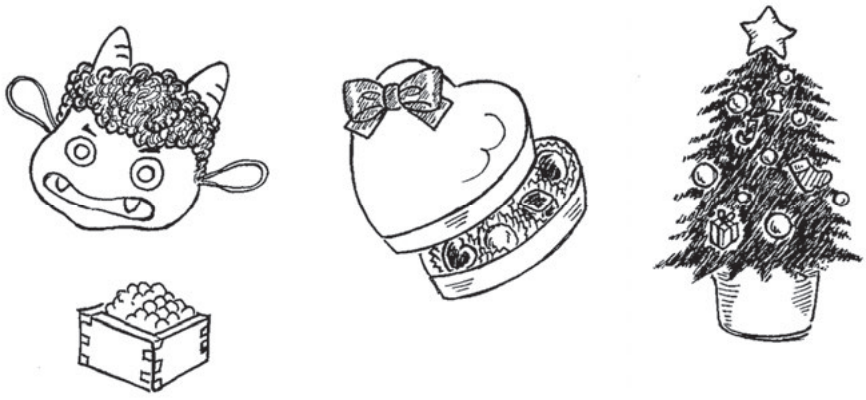
（梶原氏）「風の盆」とかですね。

（長谷川氏）素敵な候補がいろいろ。

（梶原氏）みなさんのふるさとに素敵な言葉の宝物が埋め込まれているかもわかりません。みなさんの体の中にもあるかもわかりません。季節の折々に感じとれる「なるほどわかるよ」と言ってくれるような言葉を紡ぎだしてカレンダーに書いてもらうということで、皆さま方からご意見もいただきました。ご参加いただきました。

そしてツイッターでツイートしてくださった方々、本当にありがとうございます。

Ustreamご覧の皆さまも本当にありがとうございました。



「節分」「バレンタインデー」「クリスマス」 すっかり日本に定着しています。

シンポジウム「季節が薫るひととき」（第３回日本気象協会メセナ）

開催日時：2012 年 2 月 10 日（金）　13:00 開場　13:30 開演

開催場所：メトロポリタンプラザビル 12F　池袋ステーションコンファレンス Room2

入場料　：無料

申込み　：事前申し込制（定員 90 名）

来場者数：一般 77 名（男性 58 名、女性 19 名）

報道関係 5 名（日本経済新聞社，世界日報社）

インターネットにて動画配信のアクセス数：

常時閲覧者数（平均）65 名　当日累積閲覧者 212 名

動画閲覧先：http://www.youtube.com/watch?v=fwSAQFa6tDs&feature=channel&list=UL（編集後）YouTube

案内パンフット（上図：表面、下図：表面）

【参加者の声（シンポジウム終了後のアンケート回答より）】

来場者アンケートの内容は次のとおりです。　※（）はアンケートの回答を紹介する際の表記

【1】今回参加しようと思ったきっかけは何ですか？　（1.きっかけ）
【2】特に印象に残った話があればご記入ください。　（2.印象に残った話）
【3】先生方に質問したいことがあればご記入ください。　（3.質問）
【4】今後，扱って欲しいテーマがあればご記入ください。　（4.今後）

（1.きっかけ）旧暦や天文に興味がありました。
（2.印象に残った話）どのパネリストの方も、お話が上手で内容も濃く大変楽しませていただきました。
（3.質問）確か2033年は月の名前が決められず、旧暦が作成できないと聞いたことがあります。そのあたりの解決法などを知りたいです。
（4.今後）手元資料がもっと欲しかったです。プロジェクターなどで資料を映し出すなど工夫が欲しいです。私語の大きい人がいて途中で気が散った時がありました。
（千葉県習志野市・女性）

（＊）旧暦2033年問題について
「旧暦は既に廃止されており，公的機関がどの案を採用するか決定することはないだろう．」
（国立天文台ホームページ「暦計算室」「トピックス」より）

（2.印象に残った話）長谷川さん。文学は約束事の上で成り立つものである。日本には3つの暦が生きているが、それぞれにいいものであり、否定するものではないこと。
（群馬県館林市・群馬県庁・男性）

（1.きっかけ）古代中国から伝わる二十四節気と日本の季節感とのかかわり、季節に関わる日本人の感性とはどんなものか興味がありました。
（2.印象に残った話）長谷川先生の「二十四節気と実際の日本の気候のズレが日本人の季節感を生んだ。厚い夏に秋の気配を探す、など」という話、実際に寒い冬に春の息吹を探したりすることがあります。
（東京都豊島区・会社員・男性）

（1.きっかけ）日本カレンダー暦文化振興協会からの知らせで。
（2.印象に残った話）岡田先生のベトナムでも二十四節気（大寒・小寒など）を使っている話が面白い。（東京都荒川区・会社員・男性）

（2.印象に残った話）前田修平さんの話です。
（東京都中央区・会社員・男性）

（1.きっかけ）二十四節気、七十二候に興味があるため。
（2.印象に残った話）八節以外の節気が、意味の趣きを異にしている。七十二候の扱いは（専門委員としての）岡田先生の説明で了解。
（川崎市中原区・男性）

（1.きっかけ）気象予報士会のメール案内で。
（2.印象に残った話）岡田先生のお話を直接聴くことができて大変有意義でした。
（神奈川県小田原市・会社員・男性）

（1.きっかけ）季節と言葉との関係に興味あり
（2.印象に残った話）岡田先生の暦に関する様々なお話は大変興味深くお聞きしました。
（埼玉県和光市・男性）

（1.きっかけ）「暮らし歳時記」の本が大好きで
（2.印象に残った話）岡田先生の奥深い知識と話しぶりに「もっと暦について知りたい」と思いました。（埼玉県和光市・女性）

（1.きっかけ）季節変化は常に興味の対象であり、協会メセナHPで知り参加。
（2.印象に残った話）・季語はフィクション、節気と季節実感が異なることは問題とならない（長谷川先生）。・二十四節気はそれなりに価値があり、いじる必要はない（岡田先生）。
（4.今後）気象情報と防災意識
（東京都目黒区・男性）

（1.きっかけ）知人の紹介で。
（2.印象に残った話）岡田先生。一度大学の講義を聴いてみたい。
（4.今後）日本版二十四節気の命名にあたっては「災害」防止の考えも加えてください。
（東京都千代田区・気象予報士会・男性）

(1.きっかけ)気象協会のHPを見て
(2.印象に残った話)出演者の方が各々魅力的でした。(横浜市青葉区・会社員・男性)

(1.きっかけ)日本の文化・慣習と暦の関係に興味があった。
(2.印象に残った話)日本の文化を理解するときは旧暦が重要である。暦とは人間と宇宙の関係。二十四節気を現実にはずれがある→ズレが日本人の季節感を育んだ。
(東京都豊島区・会社員・男性)

(1.きっかけ)朝日カルチャーセンターの「一億人の俳句入門」の長谷川櫂先生の講座で先生から聞きましたのがきっかけです。インターネットを扱っておりませんので、今後インターネットのみの申し込みになりますと大変難しくなりますので、宜しくお願い致します。
(2.印象に残った話)色々なことを専門の先生からお伺いできてとても素晴らしい会でした。
(千葉県・女性)

(1.きっかけ)司会・福冨さんのお誘いで
(2.印象に残った話)長谷川さん。中国から伝わった漢字、これだけでは自分の気持ちを表せないために、ひらがなが生まれた。二十四節気も本来の季節とずれている。このズレが暑い最中に秋の気配を探すような季節に敏感な日本人の感性に繋がっている。
(4.今後)天気に人の心を投影する言葉を特集して扱って欲しい。
(東京都品川区・会社員・女性)

(1.きっかけ)日本独特の自然観、季節感を若い世代にきちんと伝えていく必要があると、常々感じているので参加しました。
(2.印象に残った話)全て印象に残りました。
(4.今後)日本列島を地域別に「七十二候」の新しい季節の言葉をテーマにして欲しい。
(松戸市東平賀・男性)

(1.きっかけ)二十四節気について正しい知識を広めることが必要と考えた。
(東京都杉並区・男性)

(1.きっかけ)季節が感じられる話を聴いてみたい
(2.印象に残った話)岡田氏の整理された明快な話が印象的だった。(東京都港区・男性)

(1.きっかけ)二十四節気に興味を持っての参加。「和の魂」がキーワードになると思うから。
(2.印象に残った話)(震災後の社会の空気を読むに)－世界の中の日本を意識―
俳句はイメージの世界、約束事、フィクション、人間と宇宙のつながりといった発想。実用面と情緒の関係→現実面で両方活かす。
(4.今後)和の食文化と日本酒
(東京都杉並区・男性)

(1.きっかけ)教養のため
(2.印象に残った話)岡田先生
(4.今後)天気が初心者でも身近で分かる天気図の読み方やかんたんな天気予報方法など教えて欲しい。
(東京都港区・会社員・男性)

(1.きっかけ)暦、季節に興味を持っていたところ、新しい二十四節気を考えようとする動きに関心を持ちました。
(2.印象に残った話)イスラム暦とか世界の暦のことも面白いと思いました。
(3.質問)岡田先生へ。旧暦の朔日(ついたち)は、朔の日を含む日を各月の旧暦1日としていると思いますが、たとえば朔が日本時間で午前0～1時のとき中国はまだ前日です。そのとき、旧暦の1日は日本と中国で1日ズレ、その月の1ヶ月(旧暦)はずれるのでしょうか。または、中国と日本のどちらかを採用するのでしょうか。
(東京都杉並区・会社員・男性)

(1.きっかけ)メールでお知らせいただき好奇心で参加しました。
(2.印象に残った話)全てに関心を持ちました。皆様のお話を聞くと奥が深いなと思いました。地球全体の天気の流れ方を知ってみたいです。
(埼玉県三郷市・会社員・男性)

(2.印象に残った話)長谷川さんの"ずれているから生まれるものがある"。実用的でなくても情緒文化が生まれる。暦(旧暦二十四節気)の見方が変わりました。
(3.質問)イスラム教の暦についてもっと教えて欲しい。雨季・乾季を示すような暦上の言葉(二十四節気のようなもの)はありますでしょうか。
(4.今後)世界の暦とその国の儀式(文化)について
(東京都練馬区・会社員・男性)

(2.印象に残った話)長谷川先生のユニークな話が楽しかった。暦が二十四節気を基に作成していることを知って面白かった。岡田先生のお話が大変面白かったです。長い間の研究が礎になっていると感じました。
(豊島区勤労福祉会館・女性)

(2.印象に残った話)各先生方の二十四節気についての説明がユニークでとても分かりやすかったです。二十四節気について少し興味を持ちました。長谷川さんの声が素敵でした。俳句に少し興味がわきました。
(東京都墨田区・会社員・男性)

(2.印象に残った話)どの方もその分野で印象的でしたが、やはり岡田先生でしょうか。博識ですね。まだまだこれからお元気でがんばってください。
(東京都目黒区・会社員・女性)

(1.きっかけ)講義やエッセー(原稿)のネタとして辞典的な知識以外の話を学びたかったので。
(2.印象に残った話)①岡田先生②長谷川先生　のお二人の話は含蓄あるものでした。岡田先生の歴史的いきさつ・各国の風土も含め面的、長谷川先生の話は文化精神面で興味がある話でした。前田さんの話はパワーポイントを使ったほうが良いと思う。
(4.今後)・「気象データの質」を考える。
(埼玉県志木市・男性)

(1.きっかけ)津村書店(気象庁内)さんからご案内をいただいて。
(2.印象に残った話)岡田先生の二十四節気の成り立ちの図が分かりやすく興味深かった。前田先生の気象解説も分かりやすく面白かったです。岡田先生の二十四節気の成り立ちの図は全体を同じ長さに割るということでしたが、それは季節が春夏秋冬同じ長さという前提で無ければなりませんが、季節の長さは同じではないのでは。特に最近は秋が短いように思います。二十四節気の話ならば気候学者が得意とする専門分野なので、気候学者の話も聞いたほうが良いと思います。
(千葉県佐倉市・学生・女性)

(2.印象に残った話)「季節を感じる言葉にはバレンタインデーがあってもいい」という言葉が楽しく思いました。日本版二十四節気には「食べ物」「旅行」「祭り」なんて版を作っていただけると楽しいですね。
(4.今後)天気と「酒」「食べ物」「旅」
(埼玉県朝霞市・会社員・男性)

(1.きっかけ)招待状を頂いたので。
(2.印象に残った話)季節と言葉は奥が深いと思いました。(東京都中央区・会社員・男性)

(1.きっかけ)仲間に声をかけられた。
(2.印象に残った話)暦が3つあること、自分は2つしかないと思っていた。太陽暦・太陰暦・旧暦。気象(気候)の変化は地球の気流圏から(特に大陸からの)
(4.今後)能・野菜・果物の"旬"と気象
(東京都杉並区・会社員・男性)

(1.きっかけ)二十四節気は身近にありながら、よく知らないため知ろうと思いました。
(2.印象に残った話)・前田先生の大陸と海洋では気候にズレがあることについて。・岡田先生の旧暦と二十四節気との関連について。・長谷川先生のどんな世でも季節だけは変わらずに移っていく話。
(4.今後)天気と経済の関係、観天望気。
(東京都千代田区・会社員・男性)

(1.きっかけ)俳句をはじめたいので
(2.印象に残った話)岡田先生→旧暦について初めて詳しく知ることができ、大変参考になりました。長谷川先生→日本、日本人の心の広さ、何でも生活の中に取り込んでしまうおおらかさを知り、あまりこだわらずに行こうと思いました。「季語」についての考え方がしっかりしていました。
(俳句の方)

(2.印象に残った話)太陰暦と二十四節気が別のものだと初めて知った。二十四節気の必要な理由がよく理解できた。楽しかった。
(東京都豊島区・会社員・男性)

(1.きっかけ)パンフレットをいただきました。
(2.印象に残った話)みなさま
(4.今後)生物季節観測と七十二候日本版に興味があります・
(東京都千代田区・書店勤務・女性)。